

日本代表選手におけるスポーツ・種目転向（トランスファー）の特徴
— 日本代表選手に対する軌跡調査 —

渡邊将司¹⁾ 森丘保典²⁾ 伊藤静夫²⁾ 三宅聡³⁾ 森泰夫³⁾ 山崎一彦⁴⁾
榎本靖士⁵⁾ 遠藤俊典⁶⁾ 木越清信⁵⁾ 繁田進⁷⁾ 尾縣貢³⁾

- 1) 茨城大学教育学部 2) 日本体育協会 3) 日本陸上競技連盟 4) 順天堂大学スポーツ健康科学部
5) 筑波大学体育系 6) 青山学院大学社会情報学部 7) 東京学芸大学教育学部

Sport or event transfer characteristics of international level Japanese athletes
— Retrospective study of international level Japanese athletes —

Masashi Watanabe¹⁾ Yasunori Morioka²⁾ Shizuo Ito²⁾ Satoshi Miyake³⁾
Yasuo Mori³⁾ Kazuhiko Yamazaki⁴⁾ Yasushi Enomoto⁵⁾ Toshinori Endo⁶⁾
Kiyonobu Kigoshi⁵⁾ Susumu Shigeta⁷⁾ Mitsugi Ogata³⁾

- 1) College of Education, Ibaraki University
2) Japan Sports Association
3) Japan Association of Athletics Federations
4) School of Health and Sports Sciences, Juntendo University
5) Faculty of Health and Sports Sciences, University of Tsukuba
6) School of Social Informatics, Aoyama Gakuin University
7) Faculty of Education, Tokyo Gakugei University

Abstract

This study was conducted to elucidate sport or event transfer characteristics of international level Japanese athletes participating in track and field competition. We administered a questionnaire to 544 athletes who participated in the Olympics or World Championships, Asian Games, or Asian Athletics Championships. Considering the secular background, we specifically examined data of 296 respondents who were born after April 1958. Regarding transfer from other sport, athletes who competed in track and field events were 10% in the elementary school period, 70% in the junior high school period, and 98% in the high-school period. Most had transferred to track and field from baseball, soccer competition. Regarding intra-transfer of track and field events, especially from junior high school to high school, some athletes transferred to longer distance events (100–200m to 400m) and new events in the same event category (shot put to javelin throw). Although most athletes showed no transfer after the high-school period, they participated in fewer events.

I. 緒言

オリンピックにおいて陸上競技は、男子で24種目、女子で23種目を開催している。このように、陸上競技には多くの種目があるが、シニアで国際大会に出場するレベルの選手の中には、若年期から同

じ種目を継続している選手もいれば、種目を転向（トランスファー）している選手も存在する。例えば、女子走幅跳の日本記録保持者である井村久美子氏（旧姓・池田）は、小学校期からシニアまで、どの年代においても国内トップクラスで活躍していた（ベースボールマガジン社、2007）。一方で400mHの

表1 各種目の人数

	男子		女子		合計	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合
短距離	42	22	14	14	56	19
ハードル	19	10	10	10	29	10
中距離	7	4	6	6	13	4
長距離	26	13	23	22	49	17
マラソン	31	16	19	18	50	17
競歩	16	8	4	4	20	7
跳躍	33	17	13	13	46	16
投擲	13	7	11	11	24	8
混成	6	3	3	3	9	3
合計	193	100	103	100	296	100

為末大氏は、中学校期に100m, 200mで全国大会を制しているが、高校から400mや400mHに取り組み、シニアでは400mHにおいて世界選手権で2度の銅メダルを獲得した(為末, 2013)。トランスファーの背景には、高校から主要な大会で実施される種目数が増えることが一因として挙げられる。400mHや5000mのように、距離が長くなる種目もあれば、三段跳、やり投、ハンマー投のように新しい種目も登場する。さらに、中学校期は陸上競技以外のスポーツを実施していて、高校から陸上競技を始めるケースもある。やり投の村上幸史選手や新井涼平選手は中学まで野球を実施していた(陸上競技社, 2012, 2014)。このように、選手が種目を選択するパターンはさまざまであることがわかるが、国際大会に出場するレベルの選手が、年齢に伴ってどのような種目選択をしてきたのかを明らかにした研究は見当たらない。

そこで本研究は、日本代表選手を対象にして小学校期から青年期にかけて、どのようなスポーツや陸上競技の種目を選択して日本代表にまで至ったのかを明らかにする。

II. 方法

対象は、オリンピック、世界選手権、アジア大会、アジア選手権に出場経験のある者である。2012年の調査では、1960年から2009年までのオリンピックまたは世界選手権に出場した411名のうち、競技者として第一線を退いている選手を中心に選出し、さらに現住所が判明している204名に「陸上競技におけるトップアスリートの軌跡調査」に関する質問紙を送付して回答を依頼した(渡邊ら, 2013)。2014年の調査では、オリンピックまたは世界選手権だけでなく、アジア大会やアジア選手権に出場経

験のある、1958年4月から1992年3月までに誕生した480名を対象にした。この対象者は、調査時に大学生よりも年齢が高く(大学を卒業している者)、また対象者が中学校期に全国中学校陸上競技大会が開催されていた年齢層である。対象者には、引退した選手だけでなく現役選手も含んでいる。そのうち現住所が判明している340名に、2012年の調査で用いた同じ質問紙を送付して回答を依頼した。質問紙では、小学校期、中学校期、高校期、青年期(19~22歳頃)で中心的に取り組んでいたスポーツや陸上競技の種目を尋ねている。

集計されたスポーツや種目は、各期間、各種目群(短距離:100~400m, 中距離:800~1500m, 長距離:3000m~10000m, マラソン, 競歩, ハードル:100~400mH, 跳躍, 投擲, 混成)で単純集計し、度数や割合を算出した。データの集計には統計ソフトウェア JMP8.0 を用いた。

III. 結果

2012年の調査では151名から回答があり、当時50歳未満だった104名を抽出した。2014年の調査では192名から回答があり、合計した296名を分析の対象とした。表1には、種目ごとの人数を男女別に示した。なお、オリンピックまたは世界選手権に出場経験のある選手は199名、アジア大会またはアジア大会のみの出場経験者は97名であった。

1. 他のスポーツから陸上競技へのトランスファー(競技間トランスファー)

表2は、小学校期に実施していたスポーツの人数と割合である。小学校期に陸上競技のみを中心的に実施していた者は10%、他のスポーツと陸上競技

を掛け持ちしていた者が12%であったが、他のスポーツを実施していた者が58%と、小学校期に陸上競技を中心的に実施していなかった者の方が多かった。表3は、小学校期に実施していたスポーツの内訳と人数である。男子では、野球・ソフトボールが最も多く、サッカーが続いた。女子は陸上競技が最も多く、水泳が続いた。陸上競技を実施していた者は、男子で35名、女子で29名であったが、そのうちの45%の者は、他のスポーツと掛け持ちしていた。

中学校期に中心的に実施していたスポーツの人数と割合を表4に示した。陸上競技のみを実施していた者は70%で、他のスポーツと陸上競技を掛け持ちしていた者は11%であった。陸上競技を実施していなかった者は19%存在していた。陸上競技以外のスポーツは、野球(25名)、サッカー(15名)、テニス(9名)、バスケットボール(7名)、バレーボール(6名)の順に多かった。

高校期に中心的に実施していたスポーツの人数と割合を表5に示した。98%が陸上競技を実施していたが、他のスポーツと陸上競技を掛け持ちしていたり、まだ陸上競技を実施していなかった者が2%ほど存在していた。なお、青年期には、すべての者が陸上競技のみを中心的に実施していた。

2. 陸上競技種目のトランスファー（競技間トランスファー）

小学校期に陸上競技のみを中心的に実施していた者の小学校期と中学校期の実施種目を表6に示した。小学校期に陸上競技のみを中心的に実施していた者は29名で、そのうち28名が中学校でも陸上競技を中心的に実施していた。そのうちの76%(22名)は、小学校期に実施していた同系統の種目を中学校期でも実施していた。国際大会に出場した種目と異なる種目群であった者が3名存在していた(No. 6, 7, 8 小学校期に専門的に実施していた種目がなかった者を除く)。

中学校期に陸上競技のみを中心的に実施していた者の中学校期と高校期の実施種目を表7に示した。中学校期に陸上競技のみを中心的に実施していた者は207名であった。100・200mの代表選手は、1名を除いて中学校期から100mのみ、または100mと200mを実施していたが、100・200m以外の種目と兼ねている選手が中学校期で27%、高校期で23%存在していた。一方400mの代表選手では、中学校期に100・200mを中心に行っている選手の方が多かったが、高校期では、15名に増え、そのうち11名は

100・200mを兼ねていた。100・110mHの代表選手では、8名中6名(75%)が中学校期にハードルを経験しており、高校期には他種目と兼ねながらも全員が専門的に実施していた。400mHの代表選手では、中学校期にハードルを経験していた者は12名中5名(42%)で、400mを実施していた者よりも人数が多かった。高校期において、400mのみを中心的に実施していた者はおらず、400mや100・110mHと兼ねている者が多かった。中距離と長距離の代表選手では、それらの種目を中心的に実施しながらも、より短い距離の種目と掛け持ちしている者が多かった。マラソンの代表選手においては、中学校期では長距離と中距離種目を兼ねる者の方が多かったが、高校期では長距離のみを中心的に実施していた者の方が多くなっていた。競歩の代表選手では、9名中7名は中学校期に競歩の経験がなかった。高校期では全員が競歩に取り組んでいたが、多くは長距離種目と兼ねていた。跳躍種目の代表選手では、三段跳以外はほとんどの者が中学校期から代表になった種目を中心的に実施していた。やり投と円盤投の代表選手9名のうち、中学校期に砲丸投を経験していた者は8名存在していた。高校期では、やり投以外の選手は他の種目と掛け持ちしていた。混成では、7名中5名が中学校期から混成競技を実施していた。

青年期には、マラソン以外の代表選手全員が国際大会に出場した種目に取り組んでいた。なお、青年期でマラソンに取り組んでいた者は31名中6名(19%)で、3名は男子大学生、残りの3名は女子実業団選手であった。

表8には、中学校期から青年期までに実施していた陸上競技の種目数の割合を示した。すべての期間において2種目を実施していた者が最も多かったが、高校期から青年期にかけて、特に3種目以上実施していた者の割合が減少し、1種目のみの者の割合が高くなった。

IV. 考察

1. 競技間トランスファー

小学校期に陸上競技に取り組んでいた者は10%で、他のスポーツと掛け持ちしていた者を合わせても22%であった。小学校期における低い陸上競技実施率は、定期的に活動している陸上競技のクラブが少ないことが挙げられる。平成25年度における陸上競技のスポーツ少年団の設置割合は全国平均で1.1%であった。一方、軟式野球は20.2%、サッカーは13.0%、バレーボールは10.7%であった(日本

表2 小学校期に実施していたスポーツの人数と割合

	人数	割合
陸上競技のみ	29	10
陸上競技&他のスポーツ	35	12
他のスポーツ	171	58
なし	61	21
合計	296	100

表3 小学校期に実施していたスポーツの内訳と人数

男子		女子	
スポーツ	人数	スポーツ	人数
野球・ソフトボール	94	陸上競技(11名は陸上競技のみ)	29
サッカー	46	水泳	18
陸上競技(18名は陸上競技のみ)	35	バスケットボール	17
水泳	31	バレーボール	13
バスケットボール	10	ソフトボール・野球	11
剣道	9	スケート	4
スキー	4	スキー	2
テニス	2	テニス	2
バレーボール	2	卓球	2
空手	2	ポートボール、ハンドボール、 ドッジボール、サッカー、フット ベース、バドミントン、器械体 操、新体操、バレエ、ダンス、少 林寺拳法、剣道	1
器械体操	2		
ドッジボール、ポートボール、合 気道、体操クラブ	1		

表4 中学校期に実施していたスポーツの人数と割合

	人数	割合
陸上競技	207	70
陸上競技&他のスポーツ	34	11
野球(9)、バレーボール(5)、サッカー(5)、ソフトボール(3)、水泳(3)、テニス(2)、卓球(1)、器械体操(1)、 野球・相撲(1)、バレーボール・ノルディックスキー(1)、野球・サッカー(1)、柔道・バレーボール(1)、未記入 (1)		
他のスポーツ	53	18
野球(16)、サッカー(10)、バスケットボール(7)、テニス(7)、水泳(3)、剣道(3)卓球(3)、ソフトボール(2)バ ドミントン(1)バレーボール(1)		
無所属	2	1
合計	296	100

カッコ内は人数を表す

表5 高校期に実施していたスポーツの人数と割合

	人数	割合
陸上競技	291	98
陸上競技&他のスポーツ	2	1
野球(1)、バスケットボール(1)		
他のスポーツ	3	1
野球(1)、サッカー(1)、水泳(1)		
無所属	0	0
合計	296	100

カッコ内は人数を表す

表6 小学校期に陸上競技のみを中心的に実施していた者の小学校期と中学校期の種目

No	性別	種目群	国際大会出場種目	小学生期	中学生期
1	男	短距離	100m	100m, 走幅跳	100, 110mH, 走幅跳
2	男	短距離	100m	100m	100m
3	男	短距離	4×400mR	100m	100m, 200m
4	女	ハードル	100mH	100m, 走幅跳, 80mH	走幅跳, 三種競技B
5	男	ハードル	400mH	80mH	110mH
6	男	ハードル	400mH	100m	110mH
7	女	ハードル	400mH	走幅跳	*
8	男	中距離	1500m	100m, 走幅跳	100m, 走幅跳, 3000m
9	男	中距離	1500m	1000m	3000m
10	女	中距離	1500m	100m, 駅伝, 800m	200m, 400m, 800m
11	男	長距離	5000m	-	1500m, 3000m
12	女	長距離	10000m	100m, 走幅跳	800m
13	女	長距離	10000m	100m, 800m	800m, 1500m, 駅伝
14	男	マラソン	マラソン	-	3000m
15	男	マラソン	マラソン	-	3000m
16	女	マラソン	マラソン	800m	3000m
17	男	マラソン	マラソン	1500m, 3000m	1500m, 3000m
18	女	競歩	20kmW	短距離, 中距離	800m
19	男	競歩	20kmW	長距離	競歩
20	男	跳躍	走幅跳	100m, 走幅跳	100m, 走幅跳
21	男	跳躍	走幅跳	100m, 走幅跳	走幅跳
22	男	跳躍	走高跳	100m, 走高跳	走高跳
23	男	跳躍	三段跳	50m, 走幅跳	100m, 走幅跳
24	男	跳躍	棒高跳	100m, 走幅跳	棒高跳, 走幅跳
25	女	跳躍	走幅跳	走幅跳, 80mH, 100m	走幅跳, 100mH, 三種B, 100m
26	女	跳躍	三段跳	100m, 走幅跳	100m, 走幅跳
27	女	跳躍	棒高跳	100m, 走高跳, 長距離	走高跳
28	女	投擲	砲丸投	ソフトボール投	砲丸投, 100m, ボール投
29	女	混成	七種競技	-	100m, 砲丸投, 三種競技

*: 中学生期では文化部に所属

表7 中学校期に陸上競技のみを中心的に実施していた者の中学校期と高校期の種目

国際大会 出場種目	人数	中学生期の実施種目			高校生期の実施種目		
		G1	G2	G3	G1	G2	G3
短距離	47						
100・200m	30	21	8【走幅跳(4)、混成(3)、 長距離(2)、ハードル (3)、三段跳(1)】	1【走幅跳・混成(1)】	23	7【走幅跳(5)、混成(3)、 400m(1)、ハードル(1)】	0
400m	17	1	3【100・200m(3)、1500m (1)】	13【100・200m(12)、ハー ドル(2)、800m(1)、走幅 跳(1)、混成(1)】	4	11【100・200m(11)】	2【100・200m(1)、 110mH・400mH(1)】
ハードル	20						
100・110mH	8	4	2【100m(1)、混成(1)】	2【100m(2)、走高跳(1)】	4	4【100m(2)、400mH(1)、 走幅跳(1)、走高跳(1)】	0
400mH	12	0	0	12【ハードル(5)、100・ 200m(4)、中距離(2)、 400m(2)、走幅跳(1)、 走高跳(1)】	0	10【400m(6)、100・ 110mH(4)、混成(3)、 100・200m(2)、800m (1)】	2【400m(1)、110mH(1)】
中距離	9	0	5【400m(3)、3000m(2)、 100・200m(2)、ハードル (1)、走高跳(1)】	4【100・200m(3)、3000m (1)、棒高跳(1)、走幅跳 (1)】	1	7【400m(3)、3000・ 5000m(3)、200m(1)、 400mH(1)】	1【100・200・400m(1)】
長距離	33	10	13【中距離(12)、走幅跳 (1)】	10【中距離(8)、100・ 200m(2)、ハードル(1)】	10	19【中距離(19)、400m (1)】	4【中距離(3)、400m (2)、100・200m(1)】
マラソン*	31	9	11【中距離(11)】	11【中距離(10)、100・ 200m(1)】	21	8【中距離(7)、100～ 400m(1)】	3【中距離(3)】
競歩	9	1	1【中長距離(1)】	7【中長距離(7)、棒高跳 (1)】	4	5【中長距離(5)】	0
跳躍	37						
走高跳	11	10	1【混成(1)】	0	10	1【三段跳・110mH(1)】	0
棒高跳	10	4	4【走幅跳(2)、ハードル (2)、混成(1)、200m (1)】	2【走幅跳(1)、走高跳 (1)】	7	2【ハードル(1)、三段跳 (1)】	1【走幅跳(1)】
走幅跳	8	1	6【100m(5)、混成(3)、 ハードル(2)、走高跳 (2)】	1【走高跳(1)】	1	7【100m(5)、100mH(1)、 400m(1)、やり投(1)】	0
三段跳	8	0	2【100m・走幅跳(2)】	6【走幅跳(6)、100m (2)、走高跳(1)、ハー ドル(1)、長距離(1)】	1	5【走幅跳(5)、100m(1)】	2【走り幅跳び(2)、100m (1)】
投擲	11						
やり投	5	0	0	5【砲丸投(4)、ソフトボー ル投・ジャベリックスロー (3)、100m(2)、混成 (2)、円盤投(1)、走高跳 (1)、走幅跳(1)、ハー ドル(1)】	3	2【砲丸投・円盤投(2)】	0
円盤投	4	0	1【砲丸投(1)】	3【砲丸投(2)、走幅跳 (2)、混成(2)】	0	4【砲丸投(3)、混成(2)】	0
砲丸投	2	0	2【100m・ソフトボール投 (1)、混成(1)】	0	0	2【やり投(1)、円盤投・ハ ンマー投(1)】	0
混成	7	5	#	2【100m(1)、400m・走幅 跳(1)】	5	2【三段跳(2)】	2【400mH(1)、100m・やり 投・走幅跳(1)】

数字はその種目を実施していた人数を表す。

G1: 国際大会に出場した種目のみを実施していたグループ、G2: 国際大会に出場した種目以外も実施していたグループ、G3: 国際大会に出場した種目を実施していなかったグループ

*: マラソンは、中学または高校生期に「長距離」を専門にしていたかを判断基準とした。

#: 混成競技に含まれていない種目がある場合は記した。

表8 各時期における陸上競技の実施種目数の割合

	中学校期	高校期	青年期
1種目	39	29	43
2種目	44	47	43
3種目	10	18	10
4種目以上	7	6	4

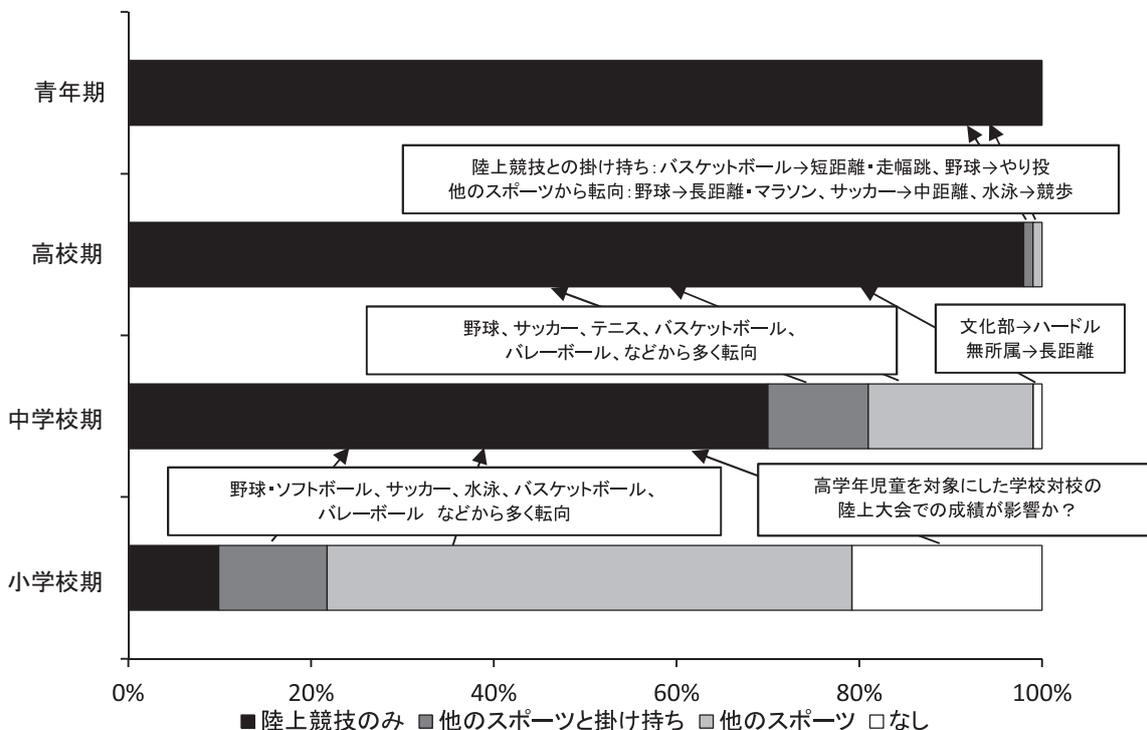
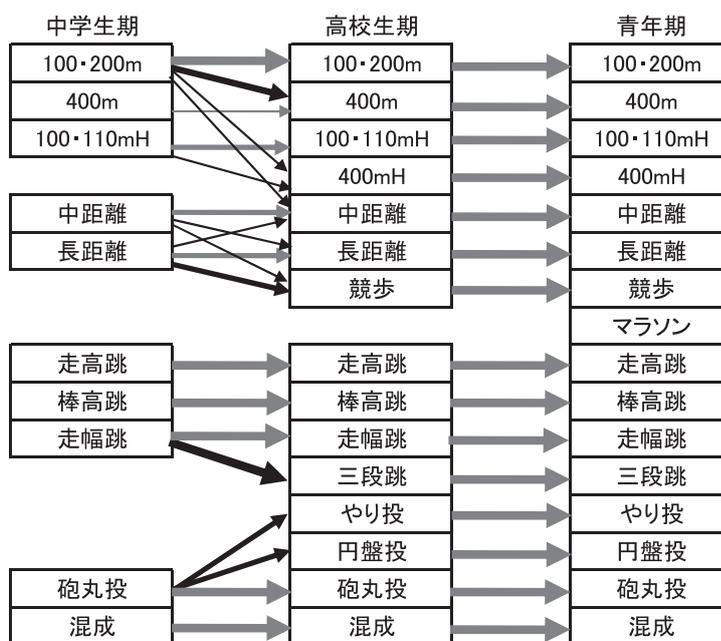


図1 小学校期から青年期にかけての競技間トランスファー



種目を継続またはトランスファーした者の割合

矢印なし: 0~19%、 → : 20~50%、 → : 51~79%、 → : 80~100%

*濃矢印は他の種目へのトランスファーをあらわし、薄矢印は同じ種目への継続への移行を表している

図2 中学校期から青年期にかけての種目間トランスファー

体育協会 HP)。この割合は、データが公表されている平成 14 年まで遡ってみても同程度であった。陸上競技に取り組みたくても取り組めない背景があるかもしれない。ところが中学校期になると、陸上競技を中心的に実施する者が 70%に増加することからわかるように、何らかのきっかけで中学校から陸上競技を本格的に始めるようになる。その要因の 1 つとして、小学校での陸上競技大会を挙げることができる。多くの地域において、小学校高学年で市町村レベルの陸上競技大会が実施されているため、短期的に陸上競技に取り組んでいた可能性がある。そこで好成績を収めることが中学校で陸上競技に中心的に取り組むきっかけになっているかもしれない。

中学校期には 70%の者が陸上競技を中心的に実施していたが、残りの 29%は他のスポーツが中心、または陸上競技と他のスポーツを掛け持ちしていた者であった。その中でも野球、サッカー、バスケットボール、テニス、バレーボールが多いが、実施していたスポーツの種類は多岐に渡っていた(表 4)。高校から陸上競技を本格的に始めた者の陸上競技種目をみると、特定の種目に偏りがあるわけではなかった。例えば、中学まで野球を中心的に実施、または陸上競技と掛け持ちしていた 25 名の国際大会出場種目をみると、マラソン・跳躍・投擲がそれぞれ 5 名、競歩・中長距離・短距離がそれぞれ 3 名、混成が 1 名であった。中学校期では、おもに学校の部活動を通してスポーツを専門的に実施するようになるが、実施していた競技の成績、個人競技への興味関心、運動会(体育祭)や学校対校の陸上競技大会(駅伝大会など)への出場などが、高校から陸上競技を始めるきっかけになっているのかもしれない。同様のことは高校期から青年期にかけても起こっていると思われる。図 1 には、小学校期から青年期にかけて起こった、競技間への転移をまとめた。

2. 種目間転移

小学校期に陸上競技のみを中心的に実施していた 29 名の中学校期での種目選択をみると、多くの者が中学校期で同じ種目または同じ系統の種目を選んでいった(表 6)。短距離、ハードル、跳躍では、ほとんどの者が同じ種目を実施していたが、中距離、長距離、マラソンをみると、小学校期に短距離や跳躍を実施している者もいた。種目を専門化していなかった者も 3 名おり、中長距離種目で将来的に活躍する選手は、小学校期から長い距離を専門化しているとは限らないと言えよう。

中学校期から高校期にかけての種目選択では(表 7)、100・200m の代表選手の 70%が中学校期に 100・200m を専門的に実施していた。他の種目と掛け持ちしていた者を合わせるとほぼ全員が 100・200m に取り組んでいた。跳躍種目とハードルの代表選手も同じ傾向で、三段跳と 400mH 以外は、ほとんどの者が中学校期から専門的に取り組んでいた。三段跳と 400mH は全国中学校体育大会(全中)の種目に入っていないので中学校期に取り組む選手は少ない。三段跳に関しては中学校期に全員が走幅跳に取り組んでおり、三段跳は走幅跳と同じ水平跳躍種目であるため、派生的に取り組むようになると考えられる。一方で 400mH は、中学校期にハードルに取り組んでいた者が 42%で、100～400m に取り組んでいた者が 50%とほぼ半数に分かれた。ハードルから転移する原因としては、高校から高くなるハードルの高さに対応しきれずに 400mH に転向したパターンと、100・110mH の延長で 400mH に取り組むパターンが考えられる。また、中学校期までハードルに取り組んでいなかった選手においては、高校期において練習の一環でハードルに取り組んだ様子を見て、指導者が 400mH を勧めた可能性もあるが、理由は定かではない。今後、詳しく調査する必要がある。

400m、中距離、長距離の代表選手は、中学校期にそれらの種目を専門化していた者よりも、より短い距離の種目を中心的に実施していたり、より短い距離と掛け持ちしている者が多かった。つまり、400m では 100・200m、中距離では 100～400m、長距離では中距離種目を実施していた者が多かった。高校期になっても専門化する者はほとんど増えず、短い距離と兼ねている者が目立った。シニアにおいて高いパフォーマンスを獲得するためには、中学生から高校生の時期にスピードを高めておく必要があるのかもしれない。マラソンも似た傾向で、中学校期に長距離種目のみに取り組んでいる者の割合の方が低く、高校期から長距離を中心的に実施している者の割合が高くなっていた。中学校期に競歩に取り組んでいた代表選手は 9 名中 2 名であったが、高校では全員が競歩に取り組んでいた。そのすべてが中長距離から転移していた。競歩も中学校期にはほとんど取組まれていない種目である。石川県のように、県中学総体の種目に競歩種目がある地域は中学校期から専門化できるかもしれないが、ほとんどは高校期において中長距離種目の経験がある者が、指導者の勧めなどで転移したものである。

跳躍種目では、走高跳の代表選手は中学校期からほとんどの者が他の種目と掛け持ちせず専門的に実施していた。これはおそらく競技特性によるものである。指導教本（日本陸上競技連盟，2013）の跳躍種目の章において、特に助走で走高跳は他の跳躍種目と区別されている。つまり、走高跳以外の跳躍種目は直線をまっすぐ走ってきて前方に跳躍する点で類似しているが、走高跳は他の跳躍種目よりも助走速度が低く、曲線を描いた助走から上方に跳躍という点で異なる。このような種目特性からか、走幅跳の選手は100m、ハードル、三段跳を兼ねていたり、また棒高跳の選手はハードルを兼ねるといったケースが複数あった。走高跳は他の種目と類似する点が少ないことが原因で、掛け持ちせず専門的に実施してきたのかもしれない。

投擲種目では、中学校期に砲丸投に取り組んでいた者が、高校期においてやり投や円盤投に転スパーする傾向があった。中学校期の投擲種目は砲丸投が主流で、円盤投やジャベリックスローが開催される競技会は少ない。そのような背景もあってか、投げるのが得意な者は、基本的に中学校期は砲丸投を選択していたと思われる。ハンマー投についてはデータを取得できなかった。投擲に関しては人数が少ないうえに十分に質問紙を回収できなかったため、全体的な傾向を示すには不十分であると考えられる。

図2は、中学校期から青年期にかけて起こった、陸上競技種目間での転スパーをまとめた。小学校期には陸上競技のみを中心的に実施していた者は少なかったため、ここでは除外している。図中の矢印は、青年期の種目に至るまでに、どの種目からどのくらいの割合で選手が転スパーしてきたのかを表している。中学校期から高校期にかけては複雑な転スパーが起こっていたが、高校期から青年期にかけてはほとんどなかった。むしろ、高校期は複数の種目を実施しており、青年期になって種目を絞る傾向が見られた。

本研究では、日本代表選手が小学生期から青年期にかけて、どのようにスポーツや陸上競技の種目を選択してきたかを数量的には示すことができた。しかし、選手がどのようなきっかけでスポーツや種目を転スパーしたのかについては十分に明らかになっていない。小学校期や中学校期の体力水準や競技成績だけでなく、仲間や教師などの勧誘もあると考えられるので、今後さらに分析を進めていく必要がある。

V. まとめ

本研究は、オリンピック、世界選手権、アジア大会、アジア選手権に出場した日本代表選手296名を対象にして、小学校期から青年期にかけてどのようなスポーツや陸上競技の種目を選択してきたのかを分析した。陸上競技を中心的に実施していた者は、小学校期で10%、中学校期で70%、高校期で98%で、野球、サッカー、テニスなどから転スパーした者が多かった。陸上競技の種目間では、特に中学校期から高校期にかけて、100・200mから400m、中距離から長距離のように同じ系統の種目でもより長い距離の種目に転スパーしたり、同じ種目領域でも高校から始まる新しい種目（400mH、やり投など）に転スパーする者もいた。しかし、高校期から青年期ではほとんど転スパーせず、実施していた複数の種目の中から種目を絞っていることが明らかとなった。

VI. 引用文献

- ベースボールマガジン社（2007）陸上競技マガジン 2007年5月号別冊付録 アスリート名鑑，ベースボールマガジン社。
- 日本陸上競技連盟（2013）基礎から身につく陸上競技，大修館書店，96-99。
- 日本体育協会 HP スポーツ少年団登録状況，<http://www.japan-sports.or.jp/club/tabid/301/Default.aspx>（平成27年3月10日参照）
- 陸上競技社（2012）月刊陸上競技2012年1月号，講談社，16-22。
- 陸上競技社（2014）月刊陸上競技2015年1月号，講談社，18-27。
- 為末 大（2013）DAI STORY：栄光と挫折を繰り返した天才アスリートの半生。出版芸術者。
- 渡邊将司，森丘保典，伊藤静夫，三宅 聡，森 泰夫，繁田 進，尾縣 貢（2013）日本代表選手に対する軌跡調査 ー第1報ー，公益財団法人日本陸上競技連盟。